

身近な援助資源を活用してチームで支援！

不登校に限らず、子どもの様々な行動上の問題をめぐって、教師としてその理解や対応の手立てに困ることは多いものです。また、子どもの心をうまく読めて対応できていると思っていなくても、自分一人では見えていないこともあるかもしれません。学校内外の様々な援助資源の活用と、教師同士がお互いにサポートしあえるパートナーシップの精神を持つことが、子どもの支援には欠かせなくなっています。



チームで支援することの意味

- 1 複数の教師等が話し合い、その子が登校しない・できない、あるいは教室に入れない“心の事情”についてのイメージを膨らませることにより、子ども像が明確になり、適切な支援を行うことができる。
- 2 学級担任が心の支えを得ることにより、心にゆとりを持って、その子や保護者に向き合うことができる。
- 3 必要に応じて役割分担を明確にすることにより、効果的・効率的な支援を行うことができる。

まずは、教師自身が開くことから！

自分が担任している子に対して、他の教師等が意見を述べたり、教科や部活動以外の指導面でかかわりを持ったりすることを歓迎しない先生や、同学年の教師間では協力し合っても、他学年の教師や養護教諭、スクールカウンセラー、心の教室相談員等がかかわることには拒絶的な先生、いませんか？

担任でありながら、他に依存し過ぎるのでは困りますが、一人の子について様々な立場から皆で考え、かかわり、そして、かかわる者同士がお互いに“Give & Take”の良好な関係をつくりたいものです。こうした姿勢の有無が、実は子どもの情緒や行動の安定化に影響を及ぼすものなのです。

データ

不登校の子一人一人に対する校内での話し合いの実施状況

本市教育センターの実態調査より
(平成17年3月実施)

	小学校	中学校	合計 (%)
30分以上かけた話し合いを1回以上実施	68	165	233 (42.7)
30分未満の簡単な話し合いを1回以上実施	19	120	139 (25.4)
数分程度の簡単な報告を1回以上実施	23	132	155 (28.4)
実施していない	3	16	19 (3.5)

適切な対応のためには「見立て」が必要

その子の“心の事情”や、今に至るまでの経緯に目を向けることなく、安易に“わがまま、怠け、無気力”などと決めつけることは、その子の本当の姿を見失うことになりかねません。また、「登校刺激は控えるべきか?」「クラスの子に手紙を書かせたいが」などの問いに答えることもできません。

その子に合った適切な対応がなされるためには、心の発達に関する一般的知識と、現在有している情報をもとに、自らの想像力を駆使して、その子の心の世界に近づくことが必要です。

そんなとき、身近にいるスクールカウンセラーなどの「心の専門家」の力を借りるのもよい方法です。

データ

不登校の子一人一人に関するスクールカウンセラーの関与の状況
(複数回答)

同調査より

	中学校
本人に直接かかわった	111
保護者に直接かかわった	120
学級担任に直接かかわった	113
特になし もったいない!	195

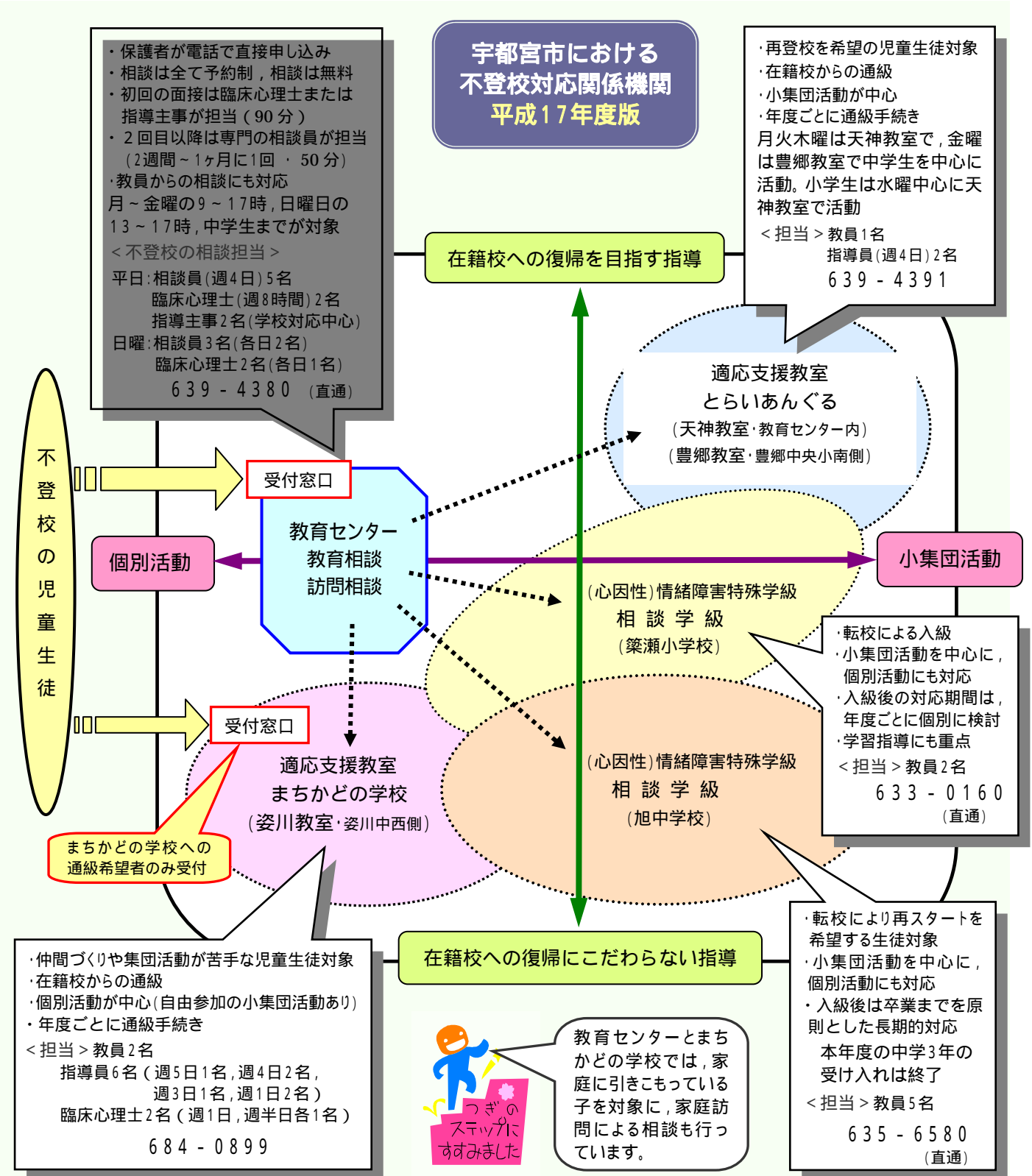
子ども本人や・保護者への紹介は、ニーズをよく確かめた上で。まずは学級担任が、その子の見立てと対応の方向性について、スクールカウンセラーと話し合うところから。

Q 中学校のSCは、小学校では活用できないのですか？

A 近隣中学校(その子がいずれ進学する中学校)のSCを、可能な範囲内で活用することは、小中連携の視点からも望ましいことです。双方の管理職の了解のもとに、中学校のSCM(スクールカウンセリングマネージャー)の先生と連絡をとり、日程調整をしてください。

裏面へ

まずは学校で対応。状況に応じて校外の相談機関や適応支援教室・相談学級の活用を考えます。



各教室・学級への通級・入級は、教育センターでの相談を行った上で、見学から開始します。
例えば、「まちかどの学校から相談学級へ」のように、子どもの状態により他の教室・学級へ移ることも可能です。
教育センター、とらいあぐる、まちかどの学校では、在籍校の学級担任等との連携を重視しています。
教育センター相談室では、保護者の了解・希望のもとに、先生方との話し合いを夕方時間帯を中心に行っています。しかしながらケース数が非常に多く、電話連絡も追いつかない状況です。必要な場合は、学校側からも教育センター相談室への連絡をお願いします。